



2012年4月

特定非営利活動法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭

天安門事件、ベルリンの壁崩壊。世界が変革に揺れ動いた1989年に山形国際ドキュメンタリー映画祭(以下YIDFF)はアジア初のドキュメンタリー映画祭としてスタートしました。時代に翻弄される人々と世界を映画として記録し、我々を取り巻く社会と格闘する映画作家たちの表現と交流の場として機能するべく、2年に1度の開催を続け、昨年で12回目となりました。

YIDFFは、世界の最先端のドキュメンタリー映画を発信する「インターナショナル・コンペティション」と、アジアの若手作家の登竜門である「アジア千波万波」という2つのコンペ部門、独自の視点で構成された各種特集プログラムから成り立っています。昨年の映画祭ではコンペ部門に、113の国と地域から1,783本の応募がありました。幾度にも渡る選考会を経て、「インターナショナル・コンペティション」では15作品が、「アジア千波万波」では24作品が上映され、それぞれが国際審査員による厳正な審査によって決定される大賞を競い合いました。およそ一週間にわたる開催期間で、計240本の映画を上映、各所でシンポジウムや質疑応答が行なわれ、映画作家と観客の率直な意見交換がなされました。

YIDFFでは作家同士、作家と観客との交流を大切にしています。映画を通じた語らいの場を作り出すこと、お互いの距離の近さからなる感情の共有が、新たな作品を生み出す原動力になると考えているからです。これはYIDFFの特色であり、第1回目から貫かれている映画祭を開催するにあたっての根幹となる考え方です。

いまでこそ1,800本近くの応募がありますが、開始当初は200本ほどしかありませんでした。しかも、その全てが欧米各国からのものに限られ、アジアからの応募が皆無でした。これはアジア各国の社会状況が大きく関係していると考えられます。1989年当時、アジアの多くの国では政治的にも経済的にもドキュメンタリー映画を作り難い状況にあったのです。ドキュメンタリー映画は時として体制批判が盛り込まれる場合もあります。作ることができたとしても弾圧の対象となり、満足に上映すらできないという映画作家が数多くいたのです。

山形市の市制施行100周年記念事業として国際的なイベントを行うことが決まった時、「ドキュメンタリー映画祭を」と提唱したのは、山形市の隣にある上山市に移り住み、土地に根ざした映画づくりを行っていたドキュメンタリー映画の世界的巨匠小川紳介監督でした。アジアのドキュメンタリー映画事情を知っていた小川監督は、その状況を変えなければならない、そのために「すべての映画に関わる意志を交流させ、助け合っていく場」としての役割がYIDFFに必要なと言いました。また「その場が一つの契機になって作品が生まれ、それがアジア全体にそれぞれの未来を予見する渦巻きをつくりだす」のだ、とも述べています。

小川監督は、1992年に亡くなりましたが、その意志は脈々とYIDFFに息づいています。「アジア千波万波」部門の最高賞には小川監督の名前が冠されています。このコンペ部門から、世界にアジアの若手作家の力を発信し続け、現在ではこの部門だけで800本を超える応募が寄せられるようになりました。

政治圧力や商業性に左右されない自由な映画作りのためには、観客と支援者の存在が大きな力となります。1999年からはそのような縁の下で力持ちたちを招き、「アジア千波万波スペシャル」と題した活動報告セミナーを開催してきました。「日韓ビデオアクティビズム」、台湾の呉乙峰監督と日本の原一男監督という2人のリーダーが率いるドキュメンタリー集団「全景 & CINEMA 塾」の活動、タイと日本の上映・配給団体を紹介する「ノンプロフィットフィルムの現在」、2003年には「インドネシア：紛争多き広大な国で イン・ドックス」と題して米国フォード財団から支援を受けるドキュメンタリー育成機関を紹介しました。また、「韓国：映画の多様性を保証する文化政策 KOFIC」にて進歩的な映画政策を掲げる韓国政府の公的機関についてリサーチ、2005年には中国のドキュメンタリー映画祭「雲之南記録映像論壇」と雲南独自の映像コミュニティの活動紹介を行いました。

アジアの作家たちの多くは自国では孤独に制作をしており、発表の場も限られています。経済的に報われる仕事ではないドキュメンタリー作りをあえて選ぶ作家たちにとって、YIDFFで熱心な観客や仲間と出会うことは大きな精神的な励みになっていきます。ドキュメンタリー映画の上映運動家たちは山形で多くの映画を鑑賞し、人的ネットワークを広げ、帰国してからの活動の肥やしとすることで、さらに作家たちの表現の場を生み出していきます。

第1回目から20年余りを経て、「アジア千波万波」で紹介した河瀬直美監督やアピチャップン・ウィーラセタクン監督は、カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞するほどメジャーな監督になりました。多くの作家たちは映画づくりを続け、さらなるひのき舞台へと飛翔しています。1989年から比べると状況は大きく変化しました。アジア社会におけるあらゆるメディアの存在が確実に変わってきている今、アジア新進ドキュメンタリストの味方であり、観客の味方であるYIDFFが今後どう変わっていくべきかは、私たちに課せられた大きな課題です。

これからの課題への次なるアプローチとして、今後は上映の機会が少ない発展途上国でYIDFFブランドの優れた作品を上映し、新たな作家誕生の土壌を育むこと、それらを通して国際文化貢献をしていくことを構想しています。次回YIDFFは2013年です。ドキュメンタリー映画界にさらなる新風を起こすべく、準備を進めてまいります。

